

自覚 7:10 (X) 7:08. 警察 7:23 (バス) (区役所) (池) 7:53 7:55 自覚 7:53

「I」 4月7日 (木) 五色不動、目青不動尊・三軒茶屋・世田谷観音寺

集合；東急田園都市線「三軒茶屋」駅中央改札口9：50分厳守同時出発) 他に西改札有り

行程；「三軒茶屋駅」→三軒茶屋跡・大山詣茶屋跡→数学院最勝寺・目青不動尊→世田谷観音→
駒繁神社→西澄寺→「三軒茶屋駅」。

昼食場所；「寿司処巴屋」1000円・TEL；03-3421-3548。

神1・五色不動 10:04~07

不動明王は大日如来の化身として、密教来伝と共に古くから尊信された。江戸時代、3代将軍家光(1604~1651・在職1623~51・秀忠の次男幼名竹千代・乳母、春日局・法度・参勤交替制度定め、島原の乱平定、鎖国令、諸国威圧し徳川氏隆盛の基礎確立)は、天海僧正の建言により、江戸府内の不動尊から5カ所の不動尊を選び、天下泰平を祈願した。これが五色不動で、密教に基づき青・黄・赤・白・黒の五色が、各々に配当されたので、五色不動とも言われた。目青不動(現、世田谷区数学院)・目黄色不動(現、江戸川区最勝寺)・目赤不動(現文京区南谷寺)・目白不動(現、豊島区金乗寺)・目黒不動(現、目黒区瀧泉寺)がそれである。慈眼大師天海が江戸城鎮護の不動明王像を造立し、王城鎮護4神にならない江戸城の四方に配置したのが目黒・目白・目赤・目青の4不動であろうと言われ、後に家光が目黄不動を加え5目不動としてまとめ、以後江戸五色不動として知られる様になった。五色とは「目」にあるのではなく「東西南北中

景 (道標) 10:13~15

2・三軒茶屋跡(大山道標；左側右富士世田谷登戸道・右側左五穀成就萬民家楽・背面天下泰平国土安穩・寛延2己年1749建立、文化9年1812再建、代官屋敷を通る旧大山道と新町經由する新大山道分岐点、三軒茶屋2-13)

江戸時代この追分け(津久井往還分岐点)の地に信楽(カガキ・のち石橋屋)・田中屋・角屋(カドヤ)の三軒の休み茶屋があり、矢倉沢往還(大山道)の目標になっていた。青山から世田谷新宿・用賀・二子を経て多摩川を渡り、海老名・伊勢原・足柄峠の矢倉沢に至る道筋である。元禄の頃、三軒茶屋は十軒余の人家があったと言われ、江戸市民の大山詣でが盛んになり、三軒茶屋は真っ直ぐ用賀に通ずる道が開かれ繁盛した。

明治に軍施設移転に伴い商店が増え、明治40年(1907)玉電開通等により商店街へと発展した。

○旧大山街道・大山詣(大山、海拔1252m・雨夫利山・雨降山・阿降利神社・奥之院自然石尊を僧徒や修験者が管理したのが始まり・6月28日から7月18日に至る盆山に集中的に行われた)

～世田谷新橋バス 世田谷山詣寺(次夏)
10:25

大山信仰は、富士信仰と同様の山岳信仰である。南北朝以後、修験の道場となり、山伏が先達(センダツ)となる講が形成された。江戸時代、阿降山大山寺が積極的に布教を心掛け、祈禱札を村々に配布し、信者から初穂料や祈禱料をとる御師檀廻制度(ホダン・師僧と旦那、寺僧と檀家)が生まれ、相模・武蔵から関東一円にかけて大山講が成立した。江戸から18里(約70km)の距離にあり、見物遊山の流行にのって、江戸で特に大山詣でが盛んになり、「大山参り」の落語にもなった。江戸結成大山詣で講は、隅田川両国橋下で水垢離をとり、白衣に着替え各人が大願成就と墨書した小太刀を携えた。江戸→東海道平塚→伊勢原→大山表道登山の他、世田谷→溝の口→厚木→大山登山ルートなどよく利用された。大山麓大滝で再度水垢離、奥の院の本尊へ持参した小太刀を奉納し、既に奉納されている別の小太刀を持ち帰り、神棚へ供えた。土産には名物の挽物細工の櫛など買われた。江戸時代富士山は女体であり、大山は男体であるとされ、富士詣でと大山詣では一連のもとされ、両方へ詣でるものとされていた。

③ 3・円泉寺(真言宗豊山派・聖王山・本尊不動明王聖徳太子・太子堂に木造聖徳太子立像・此の太子堂の号を取って地名太子堂と伝う・聖徳太子節分会)

1595(文禄4)賢恵が当地に来て一字を建立2仏像を安置した。木像聖徳太子立像(30cm)。この山号、太子堂から地名(太子堂)が生まれた。敷地内に清泉が湧き出ていたと伝えられ、1870(明治3)村民有志が郷学所(ゴウガクシヨ)を設立し、1873幼童学所、世田谷最初の小学校の小学荏原学校となった。

④ 4・数学院最勝寺・目青不動尊(キウガクイン・天台宗・竹園山・本尊阿弥陀如来不動明王滋覚大師作東都五色不動・関 東三十六不動霊場第十六番・天上界と地上界にたなびく青雲色)

不動明王像(江戸五色不動目青不動・入口左別堂安置)もと麻布観行寺から1882(明治15)移したと言う。数学院は1604(慶長9)江戸城内に創建、のち赤坂・青山に移り、1908(明治41)現在地に移転した。開山は岸能で往古相州小田原大久保氏の菩提所であった。

墓地には大久保忠真 (タガサネ・1837没天保8)・小田原藩主大久保家歴代の墓・岡本秋暉 (シユキ・江戸末画家・小田原藩に仕えた・渡辺崋山に学ぶ・花鳥画 得意・1807～62文久2) 等。

5. 駒留八幡神社 (祭神; 天照大神・応神天皇・例祭10月15日・神紋巴・社宝最明寺北条時頼公本尊経塚)

神像背部に北条時頼本尊と刻した銅板が建ててある。1682 (天和2) 此の地の領主大久保忠誠 (マサ) が紫銅 (青銅) の経筒入りの経塚を発見し、1308 (徳治3) 北条左近太郎が勧請したと銘記、戦国時代吉良頼康が子の追福の為若宮八幡を寄進奉納したと言う。頼康は愛人常盤が死に際に生んだ死産児を八幡宮に祀り、常盤は弃財天として境内に巖島神社として祀ったと言う常盤塚伝説がある

10:28~40
6. 世田谷観音 (世田谷山観音寺・旧小田原代官屋敷) ^{普賢菩薩、三鈷の松、聖観世菩薩、馬頭観音、水子神、八百崎遠勢}もと実業家の太田陸賢 (モクケン) 和尚の篤志 (トクシ・慈善心) により、1950 (昭和25) 創建、

六角不動堂に不動明王・八大童子像 (康円コウエン作・国重文毎月28日開帳) 安置。もと奈良県の内山永久寺 (廃寺) ^{文殊菩薩}の秘仏で、胎内文書によれば、1272 (文永9) 運慶の孫と伝える康円 (コウエン) と絵仏師重命 (シユウメイ) の制作。不動明王に眷属 (ケゾク・眷族・菩薩の従者) 八大童子を完備した例は珍しい。木像五百羅漢9軀 (ク・松雲元慶ゲンケイ作・都有形) は目黒五百羅漢寺から譲られたもの。特攻観音堂・梵鐘 (慶長10・1605銘)・鉄製狛犬一対;

中国清朝康熙辛未 (清朝年号コウキ・1662 万治5～1722 享保7・1691 銘元禄・カトヒツジ)。八大童子; 不動明王・文殊菩薩の使者及び眷属の八人の童子。

10:50~57
7. 駒繫神社 (コマツギ子の神・祭神; 大国主命・例祭9月18日・神紋打出の小槌・駒は馬・蛇崩川昔砂崩川とも・神楽殿時代劇ロケ利用・明治31年旧社殿昭和38年完成本殿内に納められている・名木古木、赤四手朱塗り神橋 渡る左手、大銀杏1827文政10献木と伝う、木斛モッコク稲荷社そば樹齢500年、駒繫松三代目昔鳥居そばに・境内 社、戦没慰霊招魂社、御獄神社、榛名神社三峯神社、稲荷神社2社)

平安時代後期、源頼家が父頼義と前9年の役に向かう途中武運を祈った所と伝えられ、頼朝が1189 (文治5) 奥州征伐の途中、愛馬を境内の松につないで参拝したので、神社名になったと言う。

11:08~10

8・葦毛塚 (アガ)・下馬 5-41・葦毛馬=白い毛に黒色濃褐色などの差し毛のある馬・下馬地名由来)



源頼朝が葦毛の馬に乗り此の地を通った際、馬が沢に落ちて死んだと言う。その供養塚

11:30~35

9・西澄寺 (サイヤウジ)・真言宗智山派総本山智積院末・日輪山薬王院・本尊大日如来・本堂向左側薬師堂本尊薬師瑠如来

瑠如来像脇侍日光菩薩像=薬王、月光菩薩像、守護神 1 2 神將像・家屋敷門都有形文化財・鐘楼堂明治 32 年建立近郷近在人々寄進鑄造梵鐘大戦時供出されるも戦後深川集積所で発見た・三田村慧莊和尚像昭和 29 年建立) 由緒不詳。1892 (明治 25) 無住寺を再興し、灸で知られた。山門 (都有形・両番付き石垣出屋根庇と造) 5~10 万石級の武家屋敷門の格式、旧徳島藩主蜂須賀家のもの、港区三田四国町から移築 (大正 11) と伝えられる。山門中央紋は三田村慧莊 (エウ) 和尚 (第 10 世中興開基 1858 安政 5 ~ 1938s13・薬師如来の灸術=下馬のお灸、を施した) 考案された西澄寺寺紋で「五大一」(世界一) を意味すると言う。

参考資料 (譯田家) 11:53~

10・世田谷のボロ市 (旧大山街道、世田谷代官屋敷前通り毎年 12 月 15・16 日と 1 月 15・16 日・正月用品、陶磁器、骨董品、杵臼、筵、反物、履物、日用品、大工用具、農具、園芸、器具・もともと野良着や補修用ボロが集められ売買されたのでボロ市の名が付いた)

大場家文書に、北条氏政が、世田谷新宿での六斎市 (ウサイヤ・1 と 6 の日の月 6 回開く) を 1578 年 (天正 6) に楽市として認めたとある「楽市掟書 (ウサイヤ)」起源とされる。世田谷は、下総・江戸方面と小田原方面の中間宿として栄えたが、北条氏が滅び、徳川氏が江戸に入府すると六斎市は廃れ、年 1 回の歳 (12 月) の市となった。明治になって太陽暦が用いられと、1 月に初市が開かれて年 2 回となった。

○徳富蘆花

小説家・1868 ~ 1927・蘇峰の弟・同志社中退・著に不如帰・自然と人生・思出の記・黒い目と茶色の目・みみずのたわごと等) が「みみずのたわごと」の中で、幸徳秋水 (社会主義者・1871 ~ 1911・中江兆民に師事・記者として日露戦争に反対・平民社起こし平民新聞創刊・渡米帰国後無政府主義転向・著に社会主義神髓等) が「世田谷のぼろ市」と題して、両者が面白く興味ある事を述べている。

